

データでひも解く95年ぶりの快挙 アマチュア 日本オープン制覇の 流れはできていた

アマチュア選手が日本オープンを制する。昨年、大学4年生の蟬川泰果が成し遂げた快挙はゴルフ界に衝撃を与えた。だが、これは単なる偶然の出来事ではない。長い大会史からデータをひも解くと、アマチュア選手がしっかりと実績を重ね、優勝への流れをつくっていたことが分かる。



ゴルフドム1927年6月号に掲載された記事には、「赤星六郎氏優勝す」と伝えられている

長く続いたアマチュア苦難の時代を 打ち破った丸山茂樹

戦後、日本オープンは1950年に再開された。その翌年、R・E・ハリスという米国アマチュア選手が4位に入っている。当時は日本に進駐していた米軍の兵士が何人か出場しており、ハリスもその一員だった。

ただ、日本人アマチュアは戦後、長くトップ10に食い込むことができなかった。日本アマ最多の6勝を誇り、1967年の西日本オープンでプロを抑えて優勝している中部銀次郎ですら一度もトップ10の壁を破ることができなかったのだ。

高かった壁ようやく風穴を開けたのが丸山茂樹だった。1991年、当時大学4年だった丸山は4打差7位で迎えた最終日に3連続バーディを奪うなど一時は首位に立った。「赤星六郎以来」の偉業すら狙える勢いだったのだ。終盤崩れてしまったが10位でフィニッシュする。40年ぶり、日本選手に限れば実に52年ぶりのトップ10入りだった。

2年後の1993年には大学3年の片山晋呉が3位に食い込んだ。7位から最終日に順位を上げてのフィニッシュだった。アマチュアが3位以内に入るのは第2回大会3位の赤星四郎以来、65年ぶりの出来事だった。

丸山が穿った穴を次々に登場する若い力が少しずつ広げていく。片山の次は宮里優作だ。2001年、7位に入ってしまった。

2010年には松山英樹が続く。当時のアマチュア記録を大幅に塗り替える274ストロークで3打差の3位。最終日、一時は1打差にまで迫っていた。

翌2011年には台湾の洪健堯が10位となり、2012年には大学3年になった松山が2度目のトップ10となる7位に入る。強風が吹き荒れた最終日に出した70は、この日のベストスコアタイだった。

アマチュアが活躍する度にメディア等で赤星六郎の名が登場した。「赤星六郎以来」というフレーズの使用回数は年を追うごとに多くなっていった。それは、アマチュアの実力が高まっていることの証明でもあった。

第1回日本オープンの アマチュア優勝は必然だった

第1回大会の赤星六郎以来95年ぶりの快挙—蟬川泰果の日本オープン制覇はそう報じられていた。

日本オープンの歴史を語る上で欠かすことのできない存在である赤星六郎。昨年まで大会史上、唯一無二だったアマチュアチャンピオンが生まれた第1回大会はどのようなものだったのか。

JGAが組織されたのが1924年。当時の規約の中に「日本オープン選手権競技会」の開催が謳われていた。開催が実現したのは3年後の1927年、和暦では昭和2年のことである。

会場は神奈川県程ヶ谷カントリー倶楽部。プロ5人、アマチュア12人の計17人が参加した。

日本で初めての72ホールストロークプレー競技だった。1日36ホールで2日間。初日を終えて首位から19ストローク差以内の選手が最終日に進める決まりだった。

最終日に残ったのはプロが浅見緑蔵、宮本留吉、中上数一、安田幸吉の4人、アマチュアが赤星六郎、赤星四郎、川崎肇の3人、計7人だった。首位は152ストロークの赤星六郎。2位の浅見に6打差をつけていた。

最終日も赤星六郎のプレーは揺るがず、通算309



第1回日本オープン優勝の赤星六郎

ストローク、2位の浅見に10打もの大差をつけて初代チャンピオンに輝いた。

戦前のゴルフ誌『ゴルフドム』は「日本最初のオープンチャンピオンとしての名誉は正に属すべき人に属したもので、何人も異存のないところである」という内容の記事を掲載している。赤星六郎は米国留学中にゴルフの腕を磨き、彼の地で大きな競技会を制している。帰国後は誕生したばかりの国内のプロゴルファーたちの指南役になった。当時のプロからすれば仰ぎ見るような存在だったのだ。その実力どおりに勝ったというわけである。ほかのアマチュアは赤星四郎が4位、川崎が7位という結果だった。

赤星六郎は翌年の第2回大会には出場していない。この年のアマチュア最上位は赤星四郎の3位だった。

続く第3回大会には赤星六郎も参戦したが4位に終わっている。プロが場数を踏んでレベルを上げてきたのである。

日本オープンにおいて、アマチュアのトップ10は計27回記録されている。うち半数以上にあたる15回は戦前のもの。赤星兄弟や川崎のほか、高畑誠一や鍋島直泰らが10位以内に入っている。

ただ、年を追うごとにプロの層は厚みを増し、アマチュアが上位に入る頻度は下がっていった。



日本代表選手を指導するガレス・ジョーンズ氏（左から2人目）

男子ツアー全体に視野を広げれば、2007年に当時15歳の石川遼が優勝し、2011年には松山もアマチュアで勝った。アマチュアでありながらプロのトーナメントで勝つということは夢の世界ではなく現実的な目標へと変わりつつあった。

そして2015年、JGAが放った一手がその流れを加速させていく。

ナショナルチーム改革で アマチュアのレベルがさらに高まった

2015年、JGAはナショナルチームのヘッドコーチ（HC）にオーストラリアナショナルチームコーチであるガレス・ジョーンズ氏を招へいした。最先端のプログラムでナショナルチームを強化し、世界と伍して戦える選手を育てるため、かつてない大きな改革だった。

就任してすぐ、ノムラカップアジア太平洋アマチュアチーム選手権で日本は26年ぶりの優勝を飾って早くも結果を出した。

ジョーンズHCが就任した時、女子ナショナルチームには畑岡奈紗がいた。強化プログラムで成長した畑岡は2016年、高校3年で日本女子オープンに制した。日本女子オープンでアマチュアが勝つのは初めてのことであった。

畑岡に刺激されたかのように翌2017年には男子ナショナルチームの金谷拓実が日本オープンで躍動した。5打差ながら2位で最終日を迎え、首位の池田勇太と最終組で激突。惜しくも2位のまま終了したが前年の賞金王を1打差にまで追い詰めた。

2020年の日本オープンではアマチュアが上位にひしめく展開となった。2日目を終えて河本力が首位に立ち、4人が並んだ1打差2位の中にはナショナルチームの桂川有人と杉原大河が名を連ねたのだ。

最終的には河本と杉原が5位。トップ10に複数のアマチュアが入るのは81年ぶりのことだった。

2010年日本オープン 3位の松山英樹



2017年日本オープン、「赤星六郎以来」にあと一歩まで迫ったアマチュア時代の金谷拓実（右）

2016年日本女子オープンをアマチュアで制した畑岡奈紗



最終ホールのセカンドショットを放つ蟬川泰果、彼に続くアマチュアの登場が期待される



最終ホールを終え、笑顔がこぼれる蟬川泰果

日本オープン以外でも2019年に金谷、2021年には中島啓太というナショナルチーム在籍中の面々が相次いで男子ツアーで優勝。いつアマチュアの日本オープンチャンピオンが誕生してもおかしくない流れが出来上がっていた。そして2022年、蟬川がその流れをつかみ取った。

蟬川もまたナショナルチームの一員である。

2022年4月、関西オープンに出場した蟬川は2日目を終えて単独首位に立った。3日目は73で4打差3位に後退。それでも最終日最終組でプレーする機会を得た。

結果的には77と崩れてローアマチュアも逃したが、この経験が後に生きたことは間違いない。

6月にはABEMAツアー（男子下部ツアー）で優勝する。2打差4位から63をマークしての逆転勝利だった。

8月末から9月にかけて、蟬川はアイゼンハワートロフィー世界アマチュアチーム選手権に日本代表として出場した。3日目を終えて日本は1打差2位。蟬川は個人1位の成績でチームをけん引。18大会ぶり（38年ぶり）2度目の世界一が手の届きそうなところにあった。最終日は蟬川もチームメイトも苦戦して日本は7位（蟬川は個人2位）。それでも、近年にない好成績だった。

9月下旬、蟬川はパナソニックオープンで史上6人目の男子ツアーアマチュア優勝を果たした。3日目に61を叩き出して首位に並び、最終日は終盤の5連続バーディで抜け出して並み居るプロに競り勝った。

悔し涙に暮れた関西オープンからの一連の流れが大きな結果につながったわけだ。そして、この勢いのまま日本オープンを迎えたのである。

日本オープンでの快挙（詳細は14ページの競技報告に掲載）は歴史の流れと蟬川自身の流れ、個の才能と組織的な育成が見事に融合して生まれたものではないだろうか。

2022年日本オープンはもうひとつ忘れてはいけないことがある。同じくナショナルチーム一員である杉浦悠太が3位に食い込んだことだ。87回に及ぶ日本オープンの歴史で3位以内に2人のアマチュアが名を連ねたのは初めてのことであった。アマチュアの層は、そこまで厚くなっているのである。

幾度となく使われてきた「赤星六郎以来」という枕詞は眠りに就いた。今年から日本オープンで優勝のチャンスを迎えたアマチュアは「蟬川泰果に次ぐ」という文脈で語られることになる。そして、この文言がそう遠くない未来に更新される可能性は決して低くはないはずだ。